

# 宿縁

十二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗  
本願寺派

## 中原寺

TEL 0477-372102  
FAX 0477-372102

### 報恩行に

### 生きるとは



今年もコロナ禍と世上の不安定さの中に一年が過ぎ去ろうとしています。  
親鸞聖人のご命日(旧暦十一月二十八日、新暦一月十六日)にあたり、その教えに出遇えた人びとが報恩感謝の思いから勤めずにはおられなかった「報恩講」は、浄土真宗において何よりも大切な仏事です。  
親鸞聖人の三十三回忌にひ孫にあたる本願寺の第三代寛如上人が「報恩講」とされて以来、あまた多くの人々がその伝統を受け継いでまいりました。

そして私もその大切な伝統の仏事を勤める一人の数に加えさせていただきました。というの吾が人生を振り返ってみると多くの方々のお育てによるものと思わずにはいられません。

大学を卒業(昭和三十七年)してお寺としてこれという行事もしていない私に東京のご門徒のおばあちゃんたち数人が「住職さん、報恩講はとても大切な行事だから、私たちだけでも参りますからやりましょうよ！」と声をかけてくれました。

昭和四十四年この地に念願の本堂が建立されて、当寺で報恩講が勤め始められたのも先の声のきっかけによるのです。いま改めて有難い方々のお蔭さまだったと胸が熱くなります。

報恩講は全国各地の寺院で親鸞聖人ご一代の御絵伝を本堂に掲げ、九十歳のご一生のご事績を敬い、拝読するのが特徴です。前段は八段に分け、比叡山での二十年にわたるご修行の厳しさと迷い、そしてやがて山を下り終生の師となる法然聖人との画期的出遇い。法然聖人とその弟子たちの活潑な教えの問答のありさまが展開されています。下段では八段に分け、法然さまの説かれた念仏のみ教えが盛んになるにつれて、当時の旧仏教側からそして権力者側から念仏停止の排斥を受け、師の法然さまは土佐へ弟子の親鸞さまは越後へ流罪、他の門弟

四人が死罪に処せられるという承元の法難が描かれています。やがて四年後に親鸞さまは流罪の身を解かれ、常陸の国へ移り住みます。その地での教化の姿が描かれ、そして晩年は京都にお帰りになって九十歳でご往生なされた模様が示されています。

さてそこで私たちにとって気を付けなければならぬのは親鸞聖人のご生涯を知ってもそれが報恩感謝につながるということではないのです。もちろんそれは意味がないということではありません。その親鸞さまの生涯に自分がどこに心底感動させられたかということがなければその恩を知り報謝せずにはおれないということにはなりません。このご事績が吾が人生のそれまでを根底ひっくり返したという感動をおこしたということが大事なのです。

親鸞さまが法然聖人に遇うまでの二十年間は、自身を磨き切れれば必ずさとり境地に達すると信じてやっていたが、励めば励むほど心に霧が立ち込め迷いは深くなるばかりであったと次の言葉が表しています。

「定水を凝らすといへども識浪しきりに動き、心月を観ずといへども妄雲なほ覆ふ。…」(嘆徳文)

『比叡山から見る琵琶湖は美しい。うっそうとした樹木の間から、鏡のように澄み切った水面を眺められ、聖人は、「ああ、あの湖水のように、私の心は、なぜ静まらないのか。静めようとすればするほど、散り乱れる。どうして、あの月のように、さとの月が拝めないのか。次々と、煩惱の群雲で、さとの月を隠してしまう。このままでは地獄だ。この一大事、どうしたら解

決できるのか」と、悲泣悶絶せずにはおれませんでした。』(意識)

この苦悩の末に巡り合ったのが「すでにそのような苦に沈み人間の力の限界から抜け出ることのできないことを見抜いての阿弥陀仏の救いが成就していたではないか」と説く生涯の師法然聖人の教えの前にたちどころに本願他力の教えを受得されたのです。それは澄み切った阿弥陀仏の慈悲の心に浮かびあがる慚愧と感謝の思いでありました。

その回心(親鸞聖人御年二十九歳の時)しかしそれもつかの間、三十五歳の時に承元の法難により師とは今生の別れとなりました。やっと巡り遇えた念仏の喜びから一転悲嘆の底に落とされた逆境を親鸞聖人は次のように受け止めました。

「法然聖人がご流罪にならなければ、私も流罪になって地方に赴くことはなかったでしょう。私が流罪にならなければ、地方の方々にお念仏を伝えることもありませんでした」(御伝鈔)とも語られています。

お念仏の人生は、悲しみや苦しみの出来事があるまま終わるのではなくて、身をもって仏法を深く味わい、ますます阿弥陀佛の慈悲と本願を人生の基軸とするご縁に転じられたのです。

報恩行とは、常に仏の眼を通して現実社会を見つめ、人間の偽りと日々の妄想に流される己の姿に目覚めて、念仏のまことに励まされた生き方から生まれるものでありましょう。念仏者の報恩は、「あらゆるものを撰め取って捨てないという弥陀の本願のはたらきに参加をおさせになることだ」とある先達は教えてくださいました。

【寺灯雑記】

○お仏具磨き清掃奉仕

11/5

報恩講法要をお迎えにするにあたり、お仏具磨きと清掃奉仕があり、お仏具から、本堂、庫裏、境内、会館に石段と約三十人の手により隅々まできれいにさせていただきました。終了後はみんなでカレーライスをいただき、ほどよく疲れた身体が癒されました。

○築地本願寺にて帰敬式を授式

11/15

今年三年ぶりに入場制限のないかたちで築地本願寺報恩講法要が営まれ、十一月十一日十六日までの六日間十五座にわたり勤まりました。

雅楽の演奏から始まり、大勢の僧侶の乱れぬ声明とお念仏の声が築地本願寺の大きな本堂に響き渡る様子は圧巻でした。十五日には中原寺より三名の方が参拝し、帰敬式を授式されました。御門主様よりおのみそりをいただき、法名を授与され浄土真宗の門徒としての自覚を新たにされました。

授式者

\*藤居静代様

\*児島佳守様

\*児島美智子様

○永代経志納

\*柴田桂治様

○お仏飯米進納

\*橋口秋子様

\*錦織春海様

○親鸞聖人を偲び報恩講法要

11/20、21

今年も多くのかたのご協力をいただき、二日間にわたる報恩講法要をお勤めすることが出来ました。

二十日のお速夜法要では初夜礼讃のお勤めのあと、前任職による御伝鈔の拝読、法話は住職と前任職がお話いたしました。この日は日曜日ということもあり、住職の娘がピアノの伴奏を担当、息子が出勤し、寺族総出でお勤めすることが出来ました。

二十一日のご満座法要には山崎龍明師にご法話をいただきました。圧倒的な知識と熱い情熱をもって真の宗教とは何か、念仏者としての生きかたなどについてお伝えくださいました。

今年もお斎の接待が出来ずに少し寂しくも思いましたが、新調した御絵伝を披露することができ、参詣者の皆さんも熱心にご覧になっていました。



【ブツダの教え 「お経」のことば】

「仏は永遠（とわ）に」

月が隠れると、人びとは月が沈んだとい、月が現れると、人びとは月が出たという。けれども月は常に住して出沒することがない。仏もそのように、常に住して生滅しないのであるが、ただ人びとを教えるために生滅を示す。

人々は月が満ちるとか、月が欠けるとかいふけれども、月は常に満ちており、増すこともなく減ることもない。

仏もまたそのように、常に住して生滅しないのであるが、ただ人びとの見るところに従って生滅があるだけである。

月はまたすべての上に現れる。町にも、村にも、山にも、川にも、池の中にも、かめの中にも、葉末の露にも現れる。人が行くこと百里千里であっても、月は常にその人に従う。月そのものには変わりはないが、月を見る

人によって月は異なる。仏もまたそのように、世の人びとに従って、限りもない姿を示すが、仏は永遠に存在して変わることがない。  
『大涅槃経』

【法要・行事のご案内】

○婦人会法座

十二月三日（土） 一時

・御文章を学ぶ（二帖第四通） 前任職

○門信徒会役員会

十二月三日（土） 三時半

○壮年会法座

十二月十一日（日） 三時

・御文章解説（一帖第八通） 住職

\*年末懇親会は中止いたします。

○子育てサロン（パンダっ子）

十二月十二日（月） 十一時～二時

○年末清掃奉仕

十二月二十四日（土） 十時

○教行信証を学ぶ

十二月二十四日（土） 二時

・方便化身土巻 前任職

【十一月の掲示板の言葉】

早 年末！

吾がいのちも待ったなし！